

けることはできない。とりあえずヤミ屋を始めた。農家からヤミ米を買ってきて売るカツギ屋である。札沼線のキップは一日九十枚より売られず、朝五時から並んで予約券を買い、それがなければキップが買えないのである。そのうち、前日の十時ごろから並ぶようになった。今のような立派な駅ではなく吹雪が吹き込む建物で、空き缶に炭火を入れ毛布を覆って朝五時の予約券の順番を待った。

農家を何軒も歩き、やっと売ってくれる有様。沓（くつ）がうまる雪道、肩に重みがクイ込む。やっとのことで背負ってきた米を、交番で没収されたこともあった。なんとしてでも生きねばならない。暖かいフトンで寝ることもない毎日であった。

翌二十二年夏、樺太から親・兄弟が引き揚げてきて、月寒にあった北部軍の兵舎跡に一緒に入居することとなった。窓ガラスは破られ屋根だけの建物、兵舎だからタタミなどなく床板だけ。これが引き揚げ者に割り当てられた家であった。新聞を申し込んでも断られる有様である。

私は引き揚げ後の努力で無一物からはい上がり、運送

免許事業を起こし、車両七十台、社員百名余の会社を四十九年まで経営したが、労組ができ、やむなく大手業者に譲渡し、今は小さなビルを建て賃貸しをしている。

それにしても、やっと生きて引き揚げることのできた妻が、昭和二十三年に亡くなってしまったことを付記して終わることとする。

以上の通り、敗戦と引き揚げの労苦を後世に語り継ぐと共に、犠牲となった数多くの慰霊に対し合掌するものであります。

新京から北上

新潟県 廣井由松

新京では生きる為、又ソ連兵のダワイを逃れるよう懸命に働いた、そうして家族や団の人達の来るのを待ち続け遂に十二月になった。聞くところに依れば西火梨や其の周辺の開拓団は一か所に集結してるとの事だし、ハルビンから北の方へは二日に一回汽車が行くと聞き一同敢

然と北上の決意をした。

これ迄お世話になった社頭家の奥さんや子供達とも別れを惜しみ乍ら別れたのが十二月五日でした、然し新京からハルビン迄は簡単に行けたがそこから北へは軍用列車で日本の生物など猫の子一匹も行かんとこの事だし赤軍の証明書が必要だが其の証明が容易にもえらず毎日亦も駄目今日も駄目と幾日も無駄に終り夜は寝る処もなく毎日四、五人位に分かれて泊る処を探さねばならなかった或る小学校に行ったら義勇軍だったらしい若者三、四人で玄關のような処でダルマストーブをくすぶらして居たが薪が悪いのかストーブが悪いのかぜんぜん暖かくもなく電灯も無い真暗な処で煙はもうもうと立ちこめて目も口もあけてられん程で遂には呼吸困難になりそうでした、そんな所で彼等は今度肌着のシャツをぬいでストーブの上にはシラミを掃き落しまるで大量の胡麻でも炒るかのようにはりばりばりばりと激しい音を立てて室内に響き渡り異様な悪臭が漂って吐き気がして来る、とても居たたまれず逃げ出してトキワデバートへ行つた。其処は全館難民収容所と化しており、驚いた事には各階段のオドリ

場には必ず死体が置いてあり、それが姥のように曲つてがちがちに凍り化石のようでした、そしてどの階も元売場が全部難民が寝て居り起きてる姿は一人も見えず、吠を敷き何百人か数え切れぬ程の人が全部熱病に冒かされて呻吟しており又処々にある大きな柱の根方には数枚の吠で囲がしてあり、じつとよく見てると少し動くようだが、そつと明けて見ると数人、生死の境をさまよい、かすかに生きて居るのでした、何んとも言い難い難い毒なありさまでとても平和の巷には見れない想像も出来ない事でした、まだ生きてるのに気の毒に思い成るべく風の入りぬ様みんなでそつと囲つてやり、そこから少し離れた入り口に近い処が適當の広さだしその近くに可成り多く吠が重ねて有るので、そこに寝る事に決め私が其の上に登り一枚づつ投げ出し他の人達は順良く並べて場所作りして居り吠の山が大分低くなり地面に近くなつた時足の下の方に少し硬い物を感じたが吠の縫い合せだろうと気にもせず其のまま剥ぎ取つて行つた、其の時思わず、ウワーッと叫び二メートル程すつとんだ、それは汚れた軍足を履いた死体の足だった、其の堅い感触が凍り大根のような、

何んとも言ひようの無い無気味な感じがいつ迄も足の裏にこびり着いてるようで消えませんでした、其の夜は他に目当てもないので又其の上に吠を重ねて覆い隠して敷いた処に一夜を明かしたが一晚中広場のあっち、こっちから呻き声やら脳障でスットンキョウの叫び声やらで眠ったとも眠らんともつかぬ一夜でした。

十二月初旬のハルピンは日毎に寒さが厳しく難民の生地獄であった、町を歩くと毎日のように子の遺体を背負ってさまよい歩く女性に会うのでした、あっちへ行けば向こうへ行けと忌み嫌われるし、向うへ行ってもあっちへ行けと追われ全くもうどうしていいのかわからず涙さえも乾き切つて出ないのだらうか既に放心状態になっておりました、きっと其の子の為め何んとしても生きねばと全精力を其の子に費して来たのだらうが其の子も死んでしまい、も早や生る力も望みも全身から抜けてしまい申うすべもなく考える力も失つたのだらう。背中の遺体は顔も手も足もあらわに師走の寒風にさらされたまま親は只々右往左往するのみでした、俺もあれ位の子供が居るしきつと佐藤だって中村だって丸山もみんなそうだらう

が、よもやあんな事になって居ないと思うけど、もしかしたらと悪い想像をしたり、一時も早く帰って行かねばと思うと居ても立ってもいられない焦燥に駆られるのでした、戦争とは斯くも無残なものかとつくづく思い知られるのでした、新京ハルピンと行く処行く処罪のない居留民の婦女子迄毎日何百何千と命を奪われる其犠牲の膨大さと敗者の惨さをまざまざ見せつけられ限り無い憤激の涙を禁じ得ませんでした、師走の北満の寒さは日に日に厳しく肌を刺す程になり悪夢の幻影の中に居るようなそんな数日が唯あせりのままに過ぎて遂に証明書は貰う事が出来ず仕方なく居留民会の証明だけで行く事になった。而しその証明書は必ず行けると云う保証は無く言わば有つても無くても変りが無く極めて危険此の上ない事だが運は天に任せての大博打だったそして列車はハルピンで無く次の駅からでそれも三口に一回との事、気の長い話だが仕方がない、そして立錐の余地もないとは此の事、立ったままツマ先さえ動かせなかつた。